

特集 3 商・材・研・究 IP ビデオフォン

狙うビジネスホン代替需要 受付・遠隔相談用途も急浮上

「鬼門」とまでいわれてきたIPビデオフォン市場にNTT東西が参入。一転して脚光を浴びるようになった。既存ベンダーはビジネスホンとの「連携」あるいは「代替」というアプローチで取り組みを開始した。

「インターネットに詳しい人だけでなく、子供から老人まで、幅広い世代が簡単に利用できるよう配慮した。オフィスはもちろん、さまざまな場所で利用してほしい」 NTT東日本のコンシューマ事業推進本部長である古賀哲夫常務は7月、IPビデオフォン「フレッツフォン VP1000」の記者発表会で開口一番こう語った。NTT東西は4月6日、IPビデオフォンの開発を公表。誰にでも扱える「ブロードバンド時代の黒電話」をキャッチコピーとした。それから3カ月半後の、満を持してのお披露目だった。

フレッツフォンの発表は、IPビデオ

フォン市場に大きなインパクトを与えた。「まさしく台風だった」と語るレッツコーポレーションの後藤益巳社長は、特に「6万2790円という価格には衝撃を受けた」という。同社は3年前に市場参入。長年通信機器で培ってきた技術力を活かし、時間をかけて製品を練り上げてきた。それだけに「機能面で差があるとは思わないが、まともに競合したら勝つのは難しい」と語る。

競合他社も同じ受け止め方をしたようで、「新製品の開発を一旦中断し、しばらく市場動向を観察する」事業戦略を見直すため、製品の営業活動

を中止した」等の声が相次いだ。

業界で「テレビ電話は鬼門」といわれてきたように、これまで事業に成功したベンダーはいない。IPビデオフォンも、市場といえるほどの規模は形成されていないのが実状だ。そこにフレッツフォンが登場した。

「正直に言って、一時は撤退も考えた」というレッツコーポレーションの後藤社長は、「さまざまなニーズに対してカスタマイズ対応が可能という当社の強みを活かしていけば、十分に収益性が見込める。もちろん、価格競争力もつけていく」と意欲を示すまでに変わった。今年2月に市場参入したアイティフォーの真城和一事業本部長も「他社がまだ着目していない



NTT東西の「フレッツフォン VP1000」は、簡易な操作性だけでなく、サービスの設定もガイドランスに従って簡単にできる



機能をいち早く組み込むことで、新たなユーザーを開拓していく」と積極的な姿勢だ。

ここでは、意欲的なこの2社の事業戦略にフォーカスすることで、IPビデオフォン市場の将来性を探ってみる。

簡易操作に力点

まず、NTT東西のフレッツフォンの特徴と販売戦略を整理しておこう。

VP1000は、30万画素のCMOSイメージセンサーと8インチTFT液晶ディスプレイを搭載。これを前面に押し出したデザインになっている。このため、これまでの電話機ベースのIPビデオフォンとは外観が大きく異なる。

ディスプレイにはタッチパネル方式を採用。ユーザーは画面を触りながら操作する。表示画面は電話機のボタン配置を意識したものになっており、初心者でも迷うことなく利用できる。電話帳機能や短縮ダイヤル機能を備えているため、電話番号を覚える必要もない。

MPEG-4コーデックを搭載し、VGA画面表示サイズで最大2Mbpsの映像を送受信できる。このためブロードバンド環境下では、通話相手の映像をよりリアルに再現できる。呼制御プロトコルはSIPとH.323をサポートした。

特徴は電話以外の用途にも利用できる点。タッチパネル専用のWebブラウザとメールソフトを装備し、インターネットやEメールの利用を可能にした。また、「Windows Media 9」を搭載。インターネットからダウンロードした動画コンテンツを視聴することもできる。

VP1000は、ISP各社のテレビ電話サービス、NTT東日本の「FLET'S.Net(フレッツ・ドットネット)ナンバー」に対応している。

については現在、WAKWAKの「WAKWAK TVフォン」、ぶららの「ぶららフォン for フレッツ プラスV」と「ビジネスぶららTVフォン」、@niftyの「@niftyビデオフォン-F」、BIGLOBEの「BIGLOBE TVフォン(PN)」に対応中。このほか、ASAHIネットとhi-hoが対応予定という。いずれも「050」番号を利用したサービスとなる。

は、NTT東日本が提供しているIPv6サービス「FLET'S.Net」のIPテレビ電話メニューだ。「6」で始まる6ケタの番号をダイヤルして相手呼び出す。VP1000同士だけでなく、「FLET'S.Netナンバーソフトフォン」

をインストールしたWindows XP搭載PCとも通話できる。月額使用料は525円だ。

このほか、NTTビズリンクの「テレビ会議多地点接続サービス」用端末としても利用できる。

今後は、NTTドコモの第3世代携帯電話「FOMA」のテレビ電話機能と連動させたサービスも視野に入れており、NTTグループをあげて拡販を図っていく。

VP1000は、ISPもしくはNTT東西からの直販となるほか、「家電量販店等でも広く販売していく(古賀常務)」という。年間で東西合計10万台の販売を目指している。

遠隔監視用端末を開発

レッツコーポレーションの後藤社長はフレッツフォンについて、「PC系の技術者が開発したという印象。われわれは電話の感覚を大切にすることで差別化を図っていきたい」と語る。同社の製品開発・カスタマイズのコンセプトは、「いかにして企業の業務に利用してもらうかだ」という。そこで考えた活用提案の事例は、テレビ会議システム、受付システム、遠隔監視システムの3つだ。

については、テレビ会議システムの端末として提案を行っている。ADSLやFTTHなど、安価なブロー



レッツコーポレーションの「Vizufon CL」は、セキュリティインターフェースを公開しており、販売代理店側で用途に応じたカスタマイズも可能